福島支部白河道場

支部長　三瓶啓二
分支部長　滝嶋邦彦
〒961-0981　福島県白河市北真舟 84-1
TEL 0248-27-1200
H P http://www.ne.jp/asahi/shirakawa/dojyo/

道場訪問DX part.21

Text&Photos／神田勲

日本有数の広さと設備を誇る道場は アットホームな空気の心温まる場所

今回の道場訪問ＤＸは福島支部白河道場をご紹介します。福島県は日本の都道府県中、北海道、岩手県に次ぐ第３位の面積を誇る大きな県です。そのため福島支部の道場は福島・郡山といった大きな街だけでなく、県内のあちこちに点在しています。その福島県と栃木県の県境に近い白河市内に白河道場はあります。指導に当たるのは三瓶啓二師範の片腕である滝嶋邦彦師範代。白河道場で特筆すべきは何と言ってもその広さと設備の豪華さでしょう。日本国内でも有数の設備を誇る道場を訪問してみました。

東北新幹線の新白河駅から車で数分。新幹線と国道４号線が交差するあたりに白河道場はある。

平屋建てなので、パッと正面から見ただけでは、それほど広さは感じないが、中に入ってみると、その奥行きの広さと設備に驚く。

暖炉のある入口付近のスペースには空手関係のＤＶＤや漫画が置いてあり、初めて訪れた人もくつろげる空間となっている。もちろん暖炉は飾りではなく、冬場には実際に薪をくべて暖を取ることができる。その雰囲気はまるで高原のペンションの談話室。

そしてそこを通り抜けて奥に行くと、本格的な機材が多数揃ったトレーニングジム「ＺＥＳＴ」がある。道場とは別にジムだけ使用する会員となることも可能なため、道場生ではない一般の会員も多数在籍している。

道場の広さもすごい。公共の体育館などではなく、自前の常設道場で、これだけ広い空間を持っているのは全国的に見ても数少ない。

また、震災の影響で今は休所しているものの、託児所（ぽぽんたの家）も併設しているというから設備面では至れり尽くせり。

1 子どもクラスの道場生。2 一般クラスの道場生

分支部長紹介

滝嶋邦彦 参段

たきしま・くにひこ
1963年1月23日、福島県出身

3つの特色

1 三瓶理論の伝承

2 社会教育としての空手

3 充実の設備

「三瓶先生の弟子として三瓶先生の空手理論を伝承し、武道と日本文化としての空手道を求めつつ、社会教育としての空手と道場を目指していきます。復興はまだまだ先が見えない福島ですが、空手を通じ、子どもも大人も元気に、粘り強くしなやかな心を養えれば、それが社会貢献にもなり復興への礎にもなると思っています。いわゆる空手の道場らしくない道場が自慢でもあり、設備も充実しています。宿泊する場所もありますので、遠方のみなさんもぜひ、覗きに来てみてください」

3 道場の外観。後ろの高架橋は東北新幹線。4 子どもクラスはジャンケンなどゲームの要素を取り入れてウォーミングアップをする。5 6 滝嶋師範代が手本を見せて基本稽古を念入りに行なう。7 移動稽古も基本に忠実に行なわれているか、滝嶋師範代が目を配る。8 子どもクラスが終わると一般クラスの稽古が始まる。9 コンビネーションを重視した移動稽古。10 この日は福島の本部から小柳一幸初段が出稽古にやってきた

そんな豪華な道場で指導を行なっているのは滝嶋邦彦師範代。三瓶啓二師範の片腕だ。滝嶋師範代は三瓶師範の内弟子として修行を積み、その後１９９４年から白河で空手の指導を行ない、２００６年に現在の常設道場を開設した。

夕方5時前になると「子どもクラス（小学1～6年）」の生徒たちがやってくる。福島の子どもたちは原発事故の影響で、今でも外で遊ぶことが制限されているため、体力の低下が著しいと聞く。だが白河道場に通う子どもたちには、まったく影響がないかのごとく、道場内に元気な声が響き渡る。

夜7時になると一般クラスが始まる。基本、移動と進み、軽い自由組手を行なった後、ミット稽古が始まる。滝嶋師範代は自ら突いて蹴って手本を示し教えていく。ポイントを絞って指導してくれるため、教えられる側も理解がしやすいようだ。そんな滝嶋師範代の指導を受けるため、県内外からも出稽古にくる選手がいる。

復興とはほど遠い状況が続く福島県だが、白河道場をはじめ、福島支部の道場は、一歩一歩地道に復興への道を歩んでいる。

MY KARATE LIFE

杉本幸一

すぎもと・こういち
3級
1962年7月26日生まれ

避難生活の中で見つけた希望 必ず会社は立て直す！

杉本幸一さんが空手を始めたのは高校2年の時。テレビで三瓶師範の試合を見てからだった。だが当時は極真の道場が近所になく、他流派の空手を学んで参段まで取った。

他流派の空手は7年ほど学んだが、さらに強いものを求めて極真の門を叩いたのは25歳の時。入門したのは南相馬の原町道場だった。

その後、仕事の都合で空手から遠ざかったが、東北大震災をきっかけに再び空手との縁に引き寄せられることとなる。

電子機器の製作をする会社の役員として働いていた杉本さんだが、津波で家も会社も流されたため、避難を余儀なくされた。役員として、どこかで会社の立て直しもしなくてはならなかった。白羽の矢が立ったのは白河だった。アパートを借りて避難と会社立て直しの生活が始まった。だが家族と離れ離れになり、ともすれば精神的に落ち込んでいくばかりの生活だった。

そんな中で、ある時、アパートのすぐそばに空手の道場があることに気づいた。空手を学んでいた時のことがなつかしくなり、気になってのぞいてみると、そこには見覚えのある顔がいた。滝嶋師範代だった。なつかしい新極真会の分支部とは思ってもみなかった。運命の糸は杉本さんを再び新極真空手に呼び寄せた。空手を再び学ぶことで、杉本さんは生き抜いていく希望のようなものを感じることができた。杉本さんは「会社を立て直すためにも少しでも体力をつけておかなければいけません」と力強く語るが、これからも前向きにがんばっていくだろう。

岩本道雄

いわもと・みちお
4級
1969年11月19日生まれ

週末は道場に泊まり込み おいしいビールのための稽古

岩本道雄さんが空手を始めたのは31歳の時。岩本さんはもともとボクシングが好きで、最初はボクシングを学ぼうと思っていた。しかし、白河周辺でボクシングジムを見つけることができず、とりあえず体を鍛えるためにトレーニングジムに通いだした。

トレーニングジムに通っているうちに知り合った人から白河道場を紹介された。そのころはパワーリフティングの大会に出場するほどトレーニングを積んでいたので、体力的には不安はなかった。

「空手を学ぶことで体を動かして、汗をかいて、いつも楽しかった思い出しかありません」と語る岩本さんだが、仕事の転勤の関係で6年ほどブランクになる時期があったという。

現在は白河から100㎞ほど離れた会津若松に住んでいるが、白河道場が好きでわざわざ通っている。営業の仕事をしているが、週末になると道場に泊まり込み。金曜の仕事が終わった後、すぐに道場に向かい、夜の稽古に参加。そのまま泊まって土曜は一日中道場にいて稽古。二泊して日曜の自主稽古を行なってから自宅に帰る生活が続いている。そんな岩本さんに空手の魅力を尋ねると「おいしいビールが飲めることです」と一言。

現在の目標はシニアの大会に出場して一つでも勝ち星をあげること。

「三瓶先生も還暦を越えてまだまだがんばっられるし、自分もまだまだがんばります」岩本さんの挑戦は続く。

ジェルミー・ジェイス・カフカ

じぇるみー・じぇいす・かふか
10級
1983年4月15日生まれ

福島の子どもたちに 希望と勇気を与えたい

白河で英語教師をしているジェルミー・ジェイス・カフカさんが日本にやってきたのは東北大震災と原発事故がきっかけだった。

もともと日本に興味を持ち、日本が大好きだったジェルミーさんだが、震災と原発事故は非情に心を痛めることとなった。

大学では量子物理学を学んでいたため、福島で起きた原発事故はジェルミーさんに衝撃を与えた。詳しい状況はわからないものの、ただごとではない深刻な状況であることだけは十分わかった。自分のやっている学問は一体、何のためのものなのか。人を幸せにするためのものではなかったのか。ジェルミーさんは自問自答を繰り返した。原発事故はカナダにいたジェルミーさんの人生をも変えてしまったのだ。

「福島の子どもたちに希望と勇気を与えたい」

そう考えたジェルミーさんは日本、それも福島に行くことを決意する。

2012年8月。ジェルミーさんは白河にやってきた。そして白河の小学生と中学生に英語を教える外国語指導助手として働くようになった。そこで出会った子どもたちは元気で、ジェルミーさんをホッとさせてくれた。

柔道、空手など武道に興味があり、故郷のカナダではテコンドーを学んでいたジェルミーさんは新極真会の白河道場に入門した。

大きな体を持て余すように、稽古に臨むジェルミーさんだが、現在は新極真空手の一員として青帯を目指している。カナダに帰っても空手は続けたいという。

小林祐花

こばやし・ゆうか
4級
2000年8月22日生まれ

空手のために部活は手芸部 目標は菊川唯選手

小林祐花さんが空手を始めたのは小学1年生の時。「強くなりたい」と思い、自ら両親に「空手を習いたい」と言った。父親は最初驚いたが、すぐに応援してくれるようになった。

活発で子どもの頃から運動が大好きだった小林さんは空手の稽古に通うことが楽しくて仕方なかった。

中学生になると部活動が始まるが、小林さんは運動系の部ではなく、手芸部を選んだ。その理由は早く帰れること。手芸部なら必ず5時に帰れるが、運動系の部に入ってしまうと大会前になると練習で遅くなり、道場に通うことができなくなってしまう。運動は好きだが、空手を優先するためにあえて手芸部を選んだ。

何をするにも空手の稽古を優先に考える小林さん。得意な技はカカト落としや前蹴り。まだ力強さには欠けるものの、柔軟な体から出される足技は独特の角度と軌跡で繰り出される。修練の賜物だ。

「先輩から教わったり、自分で動画サイトを見たりして研究しています」と語る小林さん。最近では一般部にも参加し、大人の男子選手と組手をすることもある。

「突きや蹴りが重くて女子の組手とは違いますが、とても勉強になって楽しいです」とのこと。

まだ大きな大会での実績はない小林さんだが、夢は大きい。現在の目標は同じ軽量級の菊川唯選手のようになること。現在は道場で毎日2時間の稽古を続ける小林さん。大きな大会で活躍する日もそう遠くはないだろう。

本格的なトレーニングジム「ZEST」が併設！

白河道場の奥のスペースにはウエイトトレーニング機材が多数置かれたトレーニングジム「ZEST」が併設されている。このジムは道場生だけではなく、一般の人にも開放しているので、トレーニングだけに通ってくる人もいるという。道場生はここでトレーニングをすることができるため、空手に必要な稽古やトレーニングはすべて白河道場だけでできてしまうのだ。機材も充実しており、トレーニング施設としても一級品。道場生がうらやましい限りだ。

▶本格的なトレーニングができる。機材も充実している

まるでペンション。本格的な暖炉

◀薪を燃やしているため、冬でも非常にあたたかい

▶DVDや漫画の棚も充実している

▶薪をくべる滝嶋師範代

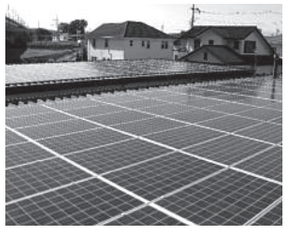
白河道場の入口に入ってまず目につくのは本格的な暖炉。とくに冬の寒さが厳しい白河では暖炉が心地よい。もちろん燃料は灯油などではなく薪を使用できる。雰囲気はどこか高原のペンションのようだ。暖炉のあるスペースには空手関係のDVDや漫画なども置かれており、ひじょうにアットホームな雰囲気を演出してくれる。

「酒を飲むおやじの會」とは？

◀鏡開きなどにも道場で集まって飲むこともある

白河道場には「酒を飲むおやじの会」というものが存在する。これは道場生やOB、少年部の父兄などのメンバーで構成される、いわば「白河道場後援会」。中には子どもがすでに道場を辞めてしまい、父兄も道場生ではないメンバーもいるとか。会長を務める長谷川禅さんもそんな一人。「道場の行事があるごとにみんなで集まって飲んでいます」と語る。このような会が成立するのも滝嶋師範代の人柄だろう。

太陽光発電で電気をまかなう



▲大がかりな太陽光パネルが設置されている

滝嶋師範代の「未来の子供たちに、自分達世代のツケを残したくない。安心・安全で自然豊かな未来を残したい」という思いから、白河道場では再生可能エネルギーの一つである太陽光発電設備を道場の屋根に設置している。太陽光パネルは道場の屋根上にフラットに設置しており、ほぼ全面に168枚で42kwの能力がある。

託児所も併設されていた道場

▲広い部屋が二つある。出稽古に来た選手たちが泊まっていくこともできるという

白河道場には広い部屋が二つある。これらの部屋は以前、託児所として使われていた。子どもを預けて稽古やウエイトトレーニングをすることもできたのだ。震災以降、残念ながら休所状態となっているものの、早期の再開が期待されている。